

## 『千葉館世継雑談』—翻刻と解題—（下）

## 要 旨

前稿に引き続き、馬琴合巻『千葉館世継雑談』（文化九年「一八一二」刊の翻刻をおこない、簡単な解説を付した）。

文化六年（一八〇九）以降、馬琴は京伝と歩調を合わせるように、歌舞伎・浄瑠璃といった演劇種の脚色や趣向を駆使した作品を数多く著しているが、本作はその方法を採らず、御家騒動を中心とする時代物として描いている。

また、本作は長編読本『南総里見八犬伝』（文化十一年～天保十三年「一八一四～四二」刊）との関係が指摘できる。例えば、千葉家の執権幕割治部之進は、馬加大記常武として描き直されている。ただ、当主頼胤に関して、本作では悪臣を討ち千葉家を再興する善良な君主であるのに対し、『八犬伝』では悪臣に操られる「暗愚の弱将」となっている。歴史上の人物に対する善悪評の変化は、勧善懲悪を標榜する馬琴の小説作法を考えるうえで、大いに注目すべき点であると言える。

キーワード：曲亭馬琴、合巻、千葉家、狐

\* 中 尾 和 昇

〔16才〕

原蔵人が娘あだしのは、追手の兵に生け捕られ、遂に治部之進が手に渡され、命取らる、と思ひしに、治部之進懇ろに労はりて、さまざまに慰め、「御親父蔵人殿は、当家の家老として、忠義無二の武士なるに、君の御心乱れさせ給へば、罪なき輩を討たせ給ふ事、嘆くにもあまりあり。君の御心静まりなば、折をもつて諫めこしらへ、兄御小次郎殿を帰参させ、再び原の家を継がせばやと思ふ也。それがし事、いまだ婚姻は取り結ばずといへとも、既に蔵人どの、許させ給ふ事あれば、そもじは我が妻とこそ思ふなれ。深く嘆き給ひそ」と、さまざまに諫めしかば、あだしのは治部之進を、父の敵なりとは思ひもかけず、「げにも、父の言ひつる事あれば、この人に頼りて、兄小次郎が事を頼まんには」と、女心のいと浅く、嬉しき人に思ひけり。かくて実胤は、今度の恩賞として、原・木の内らが所領を、悉く治部之進に給はり、家の執権職となし給ふほどに、治部之進は折をもつて、あだしのが事を聞こえあげ、「あはれ、それがしが宿の妻に給はらばや」と望

みしかば、実胤も、「さすが治部之進の申ところ、忠あり義あり」と感じ給ひて、すなはち、あだしのを治部之進に給はりけり。あだしの今年十七才、器量世に類なく、心ばえ優しきに、遂に治部之進に謀られて、二世の契りを結ひけるぞ無残なれ。

へ恥づかしい対面をいたします。我が身はともあれ、兄が事、お取り成しを頼みあげます。

へよいお人に許嫁なされて、お幸せく。男はよし、身代はもちろん、牡丹餅で尻を叩かれるやうな。

へそれがしよきに計らはん。必ず嘆き給ふな。



写真1 16才

「16ウ・17才」

これはさておき、霞の郡司が後家よどはしは、その夜さり、百姓が瓜盗人を捕へ来たりしとて、二人の若者を縛めたるを見るに、人骨柄、瓜など盗むへき者にあらず。彼ら是由ある武士の子供にて、人の讒言によつて家を追はれ、此所まで迷ひ来たりしといふその言葉、

偽りならず聞こえしかば、縛めの縄を解き許し、さて言ふやう、「我が家は、代く瓜を作りて、鎌倉の管領家に奉る也。又、隣村に鳴子の庄司といふ者あり。これも代く瓜を作りて、鎌倉殿へ奉る也。しかるに、我が家とかの鳴子の庄司と、代々境を争ふて、こゝろよからす。これによつて、我が夫郡司との、世にありし時より、鳴子氏とは音信不通にうち過ぎたり。しかるに、今年瓜畑へ盗人の入る事、もしかの鳴子の庄司がわざにて、我が瓜に妨げし、不覚をとらせんと謀るやと思ふなり。そなた衆二人、武士の子なりといへば、武芸も心掛けあるべし。もし、今宵の罪を贖はんと思はゞ、我が瓜畑を守りて、後の盗人を防ぐべし。此事を難渋せば、盗人の疑ひは、いつまでも晴れがたし。いかに承引すべきや」と言へば、頼胤主従これをき、て、「この所は、我々が身を隠すに、究竟の所なり」と思ひしかば、一議にも及ばず、「仰せ受け給はり候ひぬ。何事なりとも違背いたさず」と言ふに、「さらば」とて、よどはしは頼胤と小次郎に畑守を言ひ付け、「昼は草をむしり、作をせよ」と、いと荒々しく召し使ひけり。しかるに、よどはしはある日、娘あさつゆを伴ひて、菩提所へ参るとて、瓜畑のほとりを通りけるに、かの小次郎が、今一人の若者を敬ふ事、礼義はなはだ正しく、昼の割籠を進め、己は配膳して、主を敬ふに異ならざれば、あさつゆもろともに深く怪しみ、「いかさま、この者どもは只人ならず。子細あるべし」と思ひしかば、その日立返りて、男どもに彼らが様子を問へば、皆々答へて、「かの小次郎は、常に今一人の若者を敬ひて、彼には作をさせず、草をも刈らせず。終日野良に



写真2 16ウ・17オ

据えおきて、已一人して、二人前の働きをいたし候」と言ふに、よどはしはいよく心得がたく、さて頼胤と小次郎を呼びて、「そなた衆二人が立ち振舞を見るに、只者にはあらず。いかなる人の落ちふれたるにや、包まず名乗り給へ。我が夫郡司殿は、去年世を去り給ひにけれど、男子なければ、家督の事、心許なく思ふ也。時宜によつて婿にする事もあらん。名乗り聞かせ給へ」とて、余儀なきさまにぞ尋ねける。

へあさつゆ、あれを見やいのふ。どうしても只人しやない。品によ

つたらそなたの夫に。ア、恥づかしそうな顔はいの。

へさぞ御退屈にござりませう。まづ〱割籠を召しあげられませ。

へわが身に替りて二人前、手慣れぬわざにそちが艱難、今に始めぬ過分なぞよ。

「17ウ・18オ」

頼胤主従は、既に身の上を推量せられて、包むに由なく、「隠しては悪しかりなん」と思ひしかば、小次郎威儀を繕ひて、「今は何をか包み申さん、これにわたらせ給ふは、千葉介実胤の御舎弟、千葉の新介頼胤にてましく候ぞや。又それがしことは、千葉の執権原蔵人が倅、小次郎たゞゆきといふ者也。佞人幕割治部の進が奸計によつて、父蔵人はじめとして、譜代忠義の家子は、罪なくてあまた討たれ、妹あだしのが生死も知らず。やうやく一方を切り抜けて、頼胤の御供して、この所まで逃れ来て、憂き世を忍ぶ身の儂さ、御推量くだされ」と、一部始終を物語れば、よどはしは大きに驚き、「さては、千葉実胤の御舎弟、頼胤主従にておはせしか。我が身は、千葉家譜代の郎党、おんせう寺三郎左衛門が妹也。兄の三郎左衛門は先年、治部右衛門が野心の事に巻き添へせられ、切腹して、家断絶したりしかば、千葉家の所縁絶え果て、久しく石浜の安否を知らず、あまたの年を送りにき。か、れば、頼胤君は、我がための故主にして、かの幕割治部の進が父治部右衛門は、我が兄の敵なりし。知らぬ事とでもつたいなや。許させ給へ」と、まめやかに頼胤を傳きて、此日より野良へ出さず、

「枕の伽に召され候へ」とて、娘朝露を参らせしかば、頼胤は、よどはし親子が昔のよしみを忘れざるこ、ろさしを感じ給ひて、かの朝露を側近く召し使ひ、浅からず契り給ひけり。

○しかれども、小次郎は人の疑はん事を恐れて、毎日野良へ出、みづから鋤・鍬を取つて、瓜を作る事初めのごとく、耕作に身をゆだね、両三年を過ぐしけるに、忠臣の誠を天の憐れみ給ひけん、よどばしが所領の瓜は、悉くよくできて、鎌倉どの、御感に預かり、鳴子の庄司が所領の瓜畑は、いつも不作して、鎌倉どの、御気色よろしからず。

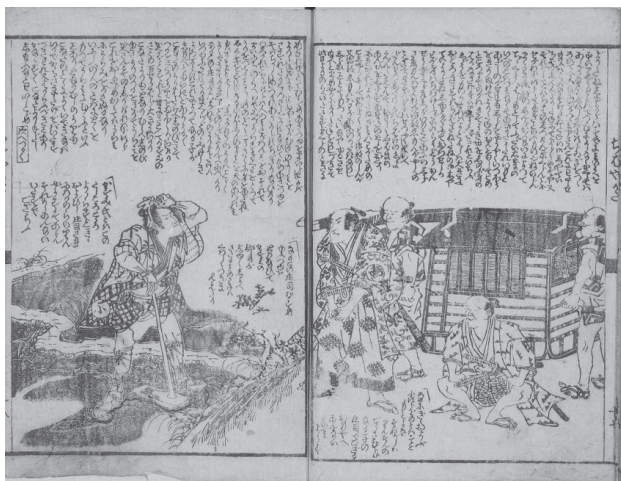


写真3 17ウ・18オ

これによつて、鳴子が僕とも憤り、夜なくこなたの瓜畑へ忍び来て、蔓を切り、瓜を多く枯らしけり。隠すとすれど世に聞こへて、霞の里の百姓ばら大きに怒り、こなたよりも隣村へ忍び行き、「瓜の蔓を切りて恨みを返さん」とて罵りければ、小次郎これを押し止め、「かくては恨みに恨みを重ねるなり。いにしへの人の言葉に、『徳をもつて恨みに報ふ』といふ事あり。隣村の瓜も、こなたのごとくによく出来なば、いかでか、る妨げをばいたすべき。我又計らふべき事あり。必ずこなたより手出しし給ふな」と制し止め、次へつゞく

「鳴子の庄司、娘夕露を伴ひて、霞の郡司が宿所へ来る事の訳は、詳しく次に見えたり。

「何、き、及ぶ小次郎殿とはそこもよな。それがしは隣村の郷侍、鳴子の庄司でござる。母屋へ案内頼み申す。

「霞氏とは、この年頃こ、ろよからすとき、及びし。庄司様俄かの来臨、様子ぞあらん。それかし案内いたすでござらふ。

「18ウ・19オ」

それより小次郎は、夜なく鳴子が畑へ忍び行き、かの瓜へ水お打ちさくをして、明け方に帰る事こと三十日に及びしかば、鳴子の庄司が瓜、思ふにましてよく出来たり。畑主の庄司、この事を伝へき、て深く感心し、「まことに、かの小次郎は頼まれなる君子なり。恥づかしや、年頃境を争ひて、霞の郡司と仲違ひし、あまつさへ、「我が瓜の出来悪しき」とて、隣の瓜畑を荒らせし事、言語道断の曲事なり」とて、

僕どもを散々に叱り懲らし、「この上は、我が誠のこゝろざしを告げて、永く隣村のよしみを結ばん」として、只一人の愛娘夕露とて、今年十八になりけるに、父か思ふ程を言ひ知らせ、きらびやかに装ひたて、乗物に乗せ、庄司みづから引添ふて、霞の郡司が屋敷に赴き、よどばしに對面して、「年頃の遺恨、小次郎が陰徳によつて、忽ちに解けたり。願はくは、永く隣村のよしみを結び、互いに隔てなく申交はすべし。については、それがしに一人の娘あり。これをもつて、かの小次郎とやらんに妻合はせ、今度の恩義に報ひ候べし。仲立ちして給はれ」と、余儀なき体に述べしかば、よどばしは鳴子の庄司が心底をき、て、忽ちに恨みも晴れ、「霞と鳴子は、元來親しき郷侍なり。中頃より、境目の論によつて、仇敵の思ひをなせし事、武士の意地といひながら、かくまで打ち解け給ふを、いかで悪しくは受け給はるべき。これといふも、小次郎が穩便の計らひによつて、両家和睦を取り結びぬ」と喜びつ、さて小次郎を呼び寄せて、事の由を言ひ聞かせ、「我ら仲立ちいたすなれば、庄司の娘夕露と婚姻し給へ」と勸むるに、小次郎は再三辞退するといへども、許さるべうもあらず。「今図らずも、霞・鳴子の輩に縁を結び、これが助けを得て、治部之進を亡ぼし、頼胤を石浜へ帰し入れ奉るよすがともならば、これも又君の御為なり」と思案して、遂に夕露を娶り、その、ち、鳴子の庄司に頼胤の事を告げて、「御味方し給へ」と勸めしかば、庄司は一議にも及ばず承引して、頼胤を敬ひ傳き、さまざまの引出物を奉りぬ。

へ鳴子の庄司か娘夕露、原小次郎が妻となる。

へ押し付けわざの婚姻も、永くよしみを結びたさ。さては、かの小次郎は、千葉の執権原藏人の子息でござるか。婿にとつては不足なし。後室、仲立ち頼みます。

へ年頃不和なる鳴子と霞、今仲直るも、小次郎どの、誠ある賜物なれば、仲立ちせいで何とせう。委細心得ましたはいの。

へすりや、どうあつてもこの婚姻を。

へとかく女子は女子どち。それく朝露、花嫁御をもてなしやいのふ。



写真4 18ウ・19オ

「19ウ・20オ」

さて、原藏人が娘あだしのは、治部之進を父の仇なりとは知らず、かねてぞ親のいひなづけし、妹背の縁を結びそえて、「只治部之進が力を添えなば、兄小次郎が帰参も叶ひ、遂には家を興す事のありもやせん」と思ひとりて、敵と知らぬ主親の、敵に二世の縁を結びて、夫婦仲睦ましく、春を迎へ秋を送り、堂次郎といふ男子さへまうけつ、はや四才にぞなりにける。夫治部之進は、千葉家の執権として、勢ひ並ぶかたもなく、家の成敗を司れば、彼を敬ひ阿る者、常に門前に市をなしぬ。あだしのは、寝覚めくにも、兄小次郎が行方覚束なく、「何とぞそのありかを尋ね、帰参の事を取り計らひて給はれ」と、夫に折々かき口説けば、治部之進もこれを慰め、「小次郎が事は氣遣ひし給ふな。そのありかだに知る由あらば、帰参の事を取り計らふべし。とかくに時節を待ち給へ」と言ひ慰さむれば、あだしのは世に頼もしく思ひけり。しかるに、治部之進が若党五武六は、顔に似げなき色好みの多せ者なるが、いつしか主の女房に思ひをかけ、人なき折々、その袖を引き、心のたけをかき口説くといへども、あだしのはいつもつれなくうち過ぎければ、五武六いよく思ひに堪へかね、ある日、治部之進が出仕の留守を窺ひ、あだしのを捕へて放さず。あだしの大きに腹立て、「主の妻に不義言ひかくる大畜生、夫が帰らば、あからさまに告げ知らせ思ひ知らせん。そこ放さずや」と罵れば、五武六は嘲笑ひ、「我を畜生とのたまへども、御身も又大畜生に異ならず。夫々と大切に可愛がり給ふ、かの治部之進殿は、御身が親の敵なる

を知り給はずや。父御藏人どの、討たれ給ひし事は、との、御心より起こりし事にあらず。斯様くの次第なり」とて、治部之進が悪巧みの一部始終を告げ知らせ、「もし、親・兄の敵を討たんとらば、まづ、我らと夫婦の契りを結び給へ。しからは、我ら助太刀して、本望を遂げさせ参らすべし。いかにく」としなだる、。



写真5 19ウ・20オ

親・兄の敵と知らず、夫婦となりて子までひり出し、嬉しそうな顔して暮らし給ふを、五年が間見ているが、いやもふ気の毒でく、小腹の立つ事のみなれど、主の悪事を言はぬがましと、今日までは

知らぬ顔して過ぎたれど、思へばあんまりいとをしい。この訳知つたは五武六一人。思ひ合はする事がござらふ。証拠のない事言ひませうか。おまへの夫は、恐ろしいはかりごとをもつて、忠臣の輩を殺し、千葉の家を横領せんとて、党を集むる連判状、そつと巻き上げておきましたは。

へそりや、五武六何と言ふ。我が親の討たれしは、治部之進どの、わざであつたか。どふいふ訳じや、それ聞かふ。証拠があらば、サ、それ見よふ。それからあとはどうぞいふ。  
へ折しも、秘蔵の片鶉、高音を上げて身の秋を告ぐる。

### 「20ウ」

あだしのは、夫の悪逆、思ひ当たる事あるに、五武六はかねて連判状を盗み取り、これを証拠として、事詳らかに知らすれば、あだしの大きに驚きて、「さては、夫治部之進殿は、我が親の敵にてありしやな。知らぬ事とて今日の日まで、妹背の契りを結びし事、返すくも悔しけれ。いかにもそなたに助太刀を頼みて、敵を討ちたくは思へども、仮初ながら夫なり」と、思ひかねて涙くめば、五武六は小躍りし、「しからば、得心さしやつたか。その義ならば仕方あり。我はこの連判状をもつて、治部之進が謀叛の事、初めより終はりまで、千葉殿へ訴へ奉り、との、仰せをもつて、討手の兵を差し向け、治部之進を討ち取らすれば、おまへは女の操も立ち、手も濡らさず親の敵を討てば、すなはち孝も立つ。我らは又その恩賞に、幕割の所領を給はり、おまへ

と夫婦末永く添ひ遂ぐるのじや。嬉しいか。どりや、そのつもりで走り注進せん」と、尻引つからげ、表の方へ走り行く。あだしの後を見送りて、抱きし我が子をかき下ろし、「守刀の紐も今、永き別れと思ふにぞ、先立つものは袖の露、消えなん後も恥づかし」と、又さめぐと泣きにけり。

へか、さん、なんで泣かしやるのじや。坊は太鼓を打つ程に、おまへはその獅子を被り、劍の舞をなされや。  
へ劍の舞をせよと言ふも、虫が知らせて介錯を、頼むと言ふのかいぢらしい。妻となり子となりし、この世からなる敵どち、そなたを殺して此母も、同じ刃に死ぬはいやい。



写真 6 20ウ

### 「21オ」

さる程に、あだしのは、切れども切れぬ悪縁の、いと苦しき胸をなで、「いかなれば、我が父の世にある時にいひなづけ、我が身をばかの人の妻にせんとはのたまひし。それ故にこそ謀られて、遂に敵の妻

となり、堂次郎といふ子まで産みて、今さらに我が親の敵と知りても討ちがたし。色にもあらず恋もせず、只我が兄を世に立てんと思ふばかりに謀られて、既にこの身を汚せし上は、我が子を殺し自害して、あの世の父とこの世の兄へ言ひ訳せん」と一筋に、思ひ詰めつ、やうやくに、守刀の紐を解き、我が子の後ろに立ち寄りて、見れば可愛や余念なく、叩く太鼓もまさにこれ、修羅の巷の鼓かと、思へば胸に突きかくる、涙は袖に玉霰、氷の刃抜きかけても、刃を当てる方もなく、そのまゝはたと伏しまろび、絶え入ることく嘆くにぞ。堂次郎は見返りて「母様なぜに泣き給ふ。」

つぎへつゞく

へ世に不幸せな者もあれど、知らで敵の妻となり、子を殺し又身を殺す。こはいつの世の報ひぞや。三千世界の悪業を、一つに寄せし親子が恨み、頼むは弥陀の御手の糸、返すぐも未来の苦患救はせ給へ。南無阿弥陀仏。

へ堂次郎が傷口より、魂獣と化して飛び去る。この訳、六の巻に見へたり。



写真 7 21 オ

「21ウ・22オ」

「つゞき」乳飲みたい」とすがりつく、我が子をそのまゝ、引寄せて、賢いやうでも年弱の、四つなれば何事も、知らで懐探すよな。母が今今の胸苦しき、推量せよ堂次郎。そなたはわしが腹には宿れど、わしがためには敵の子。そなたとわしは敵とち。とてもかくても可愛いさの、余つて殺すも後のため。必ず母を恨みなせそ。そなたを残して我一人、自害して死んではの、世の中の義理た、ず。よしや我が手にかげずとも、謀叛人の子と生まれては、助かりがたい命なり。そなたを殺せば孝も立ち、おつと、一つでないといふ事、明白に聞こえなば、そなたは母へ孝行者。聞こえぬは、この年頃、絶えず念ずる観世音。罪浅草の誓ひあらば、治部之進は、なんぢが親の敵ぞと、たゞ一言転寝の、夢枕に告げ知らしては給はらぬ。そも、我が身をば守り給ふ、神も仏もなかりしか」と、愚痴に凝つたる恩愛と、義理と誠をこき混ぜし、花の顔はせ露深く、見上ぐる窓に鶉籠、きつと見やりて振り乱す、肩の後れ毛後ろへ掻い撫で、「羨ましや、籠に飼はる、片鶉。我も今まで夫もなく、片鶉にてあるならば、かくまでに嘆きはせじ。田鼠化して鶉となると、世にいふ事の真ならば、我が魂は鶉とも、鼠とも生を愛へ、せめては兄小次郎どの、力となりて、父の敵を討たせて今の恥を隠さん。二世の契りを今ぞ切る、夫婦の縁ははやこれまで。南無阿弥陀仏」と唱へつ、乳房を啜えてすやくくと、眠る幼子引起こし、ぐつと貫く氷の刃、「あつ」と一声血潮の紅、覚悟はしても恩愛の、拳も痿えて我ながら、弱る心をととり直し、返す切先我が喉へ刺



し貫つらぬいて、堂次郎どうじらうが死骸しかいの上に伏うつし重かさなり、同じ枕まくらに息絶いきたえたり。時ときに不思議ふしぎや、あだしのが傷口きずぐちより心火燃しんくわもえ出いで、鶉籠うづらごへかゝると見みへしが、鶉うづら忽たちまち鼠ねずみと化けし、西にしを指さしてぞ飛とび去きりける。田鼠でんそう鶉うづらに化けす事ことあれば、鶉うづら鼠ねずみと化けす事ことあり。実じつに怪あやしきことゝもなり。

へ南無阿弥陀仏なむあみだぶつ。

へ▲●●の合印あはせしるしをたづねて、読よみ合あはせ給あふべし。



写真8 21ウ・22オ

「22ウ・23オ」  
実胤さねたねは、五武六ごぶろくが訴うったえによつて、治部のしん之進のしんが企たくみの初はじめ終をはりをき、

給たまひて、やうやく夢ゆめの覚さめたる心地こころし、「我われ年頃としごろ、かゝる曲者くせものを寵愛ちやうあいして、忠義ちうぎの郎党らうだうを殺ころせし事こと、今いまさら後悔こうかいするに堪たへたり。この上うへは、急いそぎ治部のしん之進のしんを搦からめ捕とるべし」とて、討手うっての兵つわものを差さし向むけ給たまふに、治部のしん之進のしんははやその気色けしきを悟さとりけん、まづ五武六ごぶろくが首くびを刎わねて、我が家いへに引籠こもり、討手うっての兵つわものを散さん々に斬きり散ちらして、悠々ゆうくと立ち去さる折をりから、はや日も暮くれて、宵闇よひやみの水音みづね高たかき水門すいもんより、榮螺さざいの殻からに火ともを灯ともし、すつくと出いづ一人ひとりの女をんな。治部のしん之進のしんこれを見みて、「敵てきか味方みかたか覚束おぼつかなし」と、行きもやらず佇たずめは、女をんなはやがて治部のしん之進のしんがほとり近ちかく歩あゆみ寄よる。

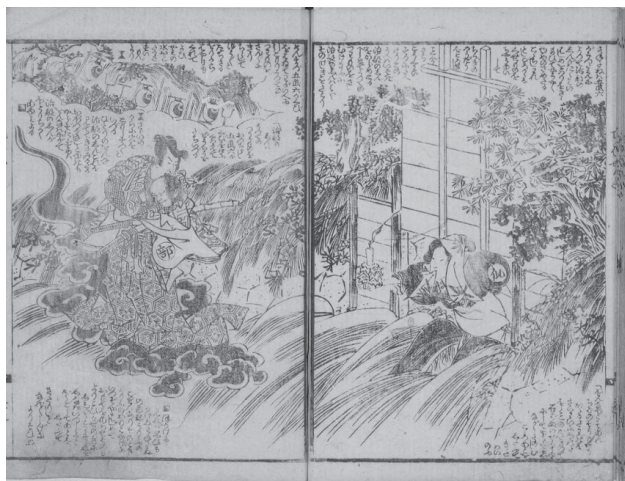


写真9 22ウ・23オ

月影に見れば、思ひもかけぬ実胤の姉瓜生野御前なり。その時、瓜生野面映ゆげに、「いつぞや初めて面を合はせ、その日より恋風の身にしみぐと忘れられず、死なば一緒と覚悟して、後を慕ふて来たりし」と、馴れくしげに寄り添ひぬ。

治部之進は、討手の兵を追つ散らし、五武六が首を口に啜えて、城中を立ち出る。

女でこそあれ、千葉の物領。かゝる騒ぎを幸いに、惚れた男の肩持つて、石浜の城主にして、行末永く楽しむ心、後を慕ふて来たはいのふ。

〔23ウ・24オ〕

よみはじめこ、に又、原蔵人が僕片介は、過ぎつる年、石浜を没落せし時、追手の兵にあだしのを奪ひ取られにけれど、小次郎が行方を尋ねて、ともかくもならばやと思ひ返し、惜しからぬ身を長らへて、武蔵・下総の間に身を隠し、よりく小次郎が行方を尋ね、あるひは密かに石浜の様子を窺ふに、「幕割治部之進が有様、目を驚かすばかりなり。されはこそ、我が主人の討たれ給ひし事、全く治部之進が讒言によつてなり。せめてこの世の思ひ出に、治部之進を討ち取つて、主の敵を報ひ、腹掻き切つて死なんには」と、心一つに思ひ定め、それより身を襲して、石浜のほとりを徘徊し、およそ三年が間つけ狙ふといへども、遂にその便りを得ず。しかるに、ある日、城中俄かに騒がしく、治部之進が野心顕れ、討手の兵を差し向けられしに、「彼早

くも城中を逃れ出たり」と罵る声、手に取るごとく聞こえしかば、片助は密かに喜び、「この時敵を討たずんば、いつの時をか期すべき」とて、かねて用意の種子島、玉うち籠めて追つかけたり。さる程に、実胤は討手の兵散々に斬り散らされ、「治部之進は、はや城中を逃れ去りし」と聞こへしかば、「言ひ甲斐なき者どもかな。いで、我自ら討ちとめん」とて、弓矢手挟み馬に乗り、手の者わづかに召し連れて、採みに採んでぞ追つかけ給ふ。はや夕月は出ながら、空かき曇りていと暗く、千束村の松原を、諸鎧打つて馳せ給ふ、後ろに響く二つ玉。

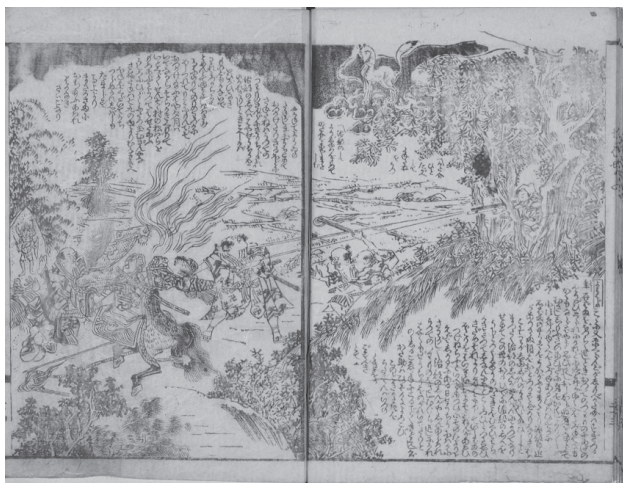


写真 10 23ウ・24オ

無残やな、実胤は七九の内より胸先へ、骨を砕いて撃ち貫かれ、しばしも堪らず馬上より、真逆様に落ち給ふ。あはれ儂き最期なり。

へ片介人違へして、実胤を撃つ。

へ治部之進、妖術をもつて、片介を過たしむ。

〔24ウ・25オ〕

されば、実胤は千束の松原にて撃たれ給ふといへとも、身に随ふもの、わづかに四五人に過ぎず。殊更宵闇にて、敵を誰とも見定めがたくて、たゞ呆れはて、すべきやうなし。かくてあるべきにあらねば、主の死骸を城中に昇きもて帰りて、事の由を告げにければ、家子・郎党色を失ひ、「こはそもいかに」と周章し、虚しく主の亡骸をうち守りて、「いかにせん」と議する折から、いつの程にか立ち返りけん、幕割治部之進は、瓜生野御前もろともに、悠々として一ト間より立ち出、「実胤懦弱の愚将にして、我が諫めを用給はず、忠義夢双の治部之進を討たんとし給ひし故に、天の責めを蒙り、匹夫下郎の手にかゝりて、敢へなくも討たれ給ひぬ。しかる上は、当家にいまだ世継ぎなしといへども、幸ひに瓜生野御前をはします。これすなはち、実胤の姉にして、女人なれども、男に勝るその才智、一城の主とするに堪へたり。今より瓜生野御前を城主と傳き、治部之進これを補佐して、千葉の家を相続なし参らせんと思ふなり。いかに」と詰め寄せたり。この勢ひに辟易して、家子・郎党再び驚き、誰あつて争ふ者もなく、皆々等しく頭を下げ、「瓜生野御前を幕割どの、補佐し給ふに、誰かは違背い

たすべき」とて、皆おめくと降参す。

言ふ事言ふたら落ち着いた。さあ治部之進、寝間しつらはして寝よはいのふ。

へ女帝を立つるは、日の本の国風。武士の家にも、政子御前は、尼將軍と言はれたり。身不肖ながら、この瓜生野、主にとつて不足はあるまい。治部之進は妾が殿御。必ず疎略に思ふまいぞ。へ異議に及べば命の際。よもや違背はあるまいがな。

へ何がさて、のふ皆の衆。どうしてあなたに菌向かふ者がござ

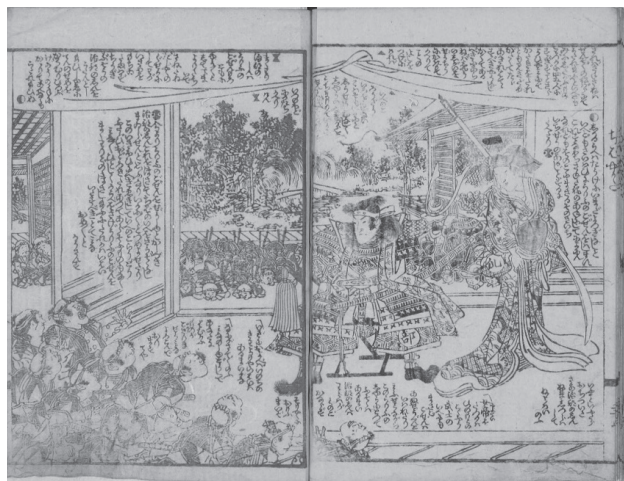


写真 11 24ウ・25オ

りませう。皆喜んでおりますてや。

〔25ウ〕

頼胤主従は、よどばし・鳴子らが助けを得て、すでに百人余りの兵を集めたれども、いまだ治部之進を討ち亡ぼすに足らず。しばらく時節を待ち給ふ程に、石浜には治部之進が野心顕はれ、実胤は千束の松原にて野伏のために撃たれ給ふと聞こえしかば、大きに驚き、頼胤は原の小次郎只一人を召し連れ、「石浜のていたらく、事の虚実を知らん」とて、その夜、二三里の道を、只一時に馳せ着けて、浅草のほとりまで来給ふ折から、頼かふりせし一人の曲者、竹槍を引提げて木の陰より飛んで出、頼胤を突かんとするを、小次郎あはやと押し隔て、刀を抜いて迎へ戦ひ、つひに竹槍を斬り落とせば、曲者は敵はじと身を翻して逃げ行くところを、頼胤早く斬り落とせし、竹槍の穂先を取つて、かの曲者を討ち止め給ふ。

へ小癩な奴の、妨げせずとそこ通せ。



写真 12 25ウ

○馬琴画賛扇

へ宿無しの頼胤主従、首にして褒美にする。覚悟しろ。

おこがましくは候へども、よんどころなく頼まれ、江戸神田鍋丁相屋半蔵・大坂心齋橋筋河内屋太助、右二ヶ所へ遣はしおき候。宿へ御申越しより近道なり。

〔26オ〕

頼胤、すでに竹槍の穂先をもつて手裏剣とし、曲者を討ち止め給へば、原の小次郎走りか、つて首を取らんとする程に、「やれ待ち給へ、若旦那」と言ひつ、被りし手拭をかい取るを見れば、小次郎がもとの僕の片介也。小次郎これを見ますく怒り、「恩を忘れて故主に齒向かふ、天罰思ひ知りつらん」と罵れば、片介は面目なげに息を吐き、「その天罰を知るゆへに、心にあらぬ竹槍三昧。竹に此身を貫かる、も、逃れぬ罪の竹鋸。語るも悔しき悪業は、この年頃、治部之進を討たんくくとつけ狙ひ、すでにかの者野心顕れ、城中を逃げ出ると聞くとひとしく、あと追つ掛け、千束の松原にて狙ひ外さぬ二つ玉。討ち止めたるは敵にあらで、思ひもかけぬ千葉の大殿。南無三宝と心も狂乱。後悔そこにした、ざれば、名乗つていで、八つ裂きに、この身をなさんと思ふ折から、行き合はせたる頼胤君、供は古主の若旦那。願ふに勝る再会を、それと名乗らで面を隠し、敵対ふて二方に討たる、は、せめてもの片助が罪滅ぼし。知らぬこと、はいひながら、大悪の曲者を早く首打ち給はれ」と、言ふも今際の苦痛なり。

「この期に及んで何言ひ訊。若君おき、なされましたか。  
 望みにまかせ、頼胤がイテ首打つて、亡き兄上の孝養にせん。観  
 念せよ。  
 面目ない若旦那。竹槍の刑罰は、せめてもの罪滅ぼし。忠を尽く  
 して不忠となる、下郎めが不幸わせ。思へばこの身が恨めしい。」



写真 13 26 才

「26ウ・27オ」  
 頼胤主従ははからずも片介を討ち止めて、首を道のほとりに切り掛  
 け、「この上は、主従二人なりとも石浜へ夜討して、治部之進を亡ぼし、  
 家の安危を一時に定むべし」とて、拳をさすつて立ち給ふ。かゝる所  
 に、鳴子の庄司は近郷の野伏・百姓ばらをあまた駆り催して、頼胤の  
 後を慕ひつゝ、馳せ来り、さて申すやう、「君、今夜慌たしく立ち出  
 給ひしかば、いとく心許なさに、志ある者どもを駆り催し、御後  
 を慕ひて来つる途中にて、一人の女に会ひぬ。かの女、我が輩に向か  
 ひて、『これは原の小次郎が妹にあだしのといふ者也。かやうくの事

によつて、幕割治部之進に謀られ、彼が妻となりて堂次郎といふ子を  
 まうけたり。しかるに、若党五武六といふもの、告げたるによつて、  
 はじめて治部之進は父藏人の敵なるよしを知りて後悔し、幼き堂次を  
 刺し殺し、自害して失せたり。せめては魂の鳥獣ともなりて、ありし  
 日の志を果たし侍らんために、恥を忍びて参りたり。されば、頼胤  
 朝臣石浜へ夜討し給はゞ、堀を埋め堀を穿ち、城中の案内をいたすべ  
 し。このよしよろしく申給へ」と言ふかと思へば、かき消すごとくに  
 失せたり。あまりに不思議に候へば、ますく道を急ぎて馳せ参り候」



写真 14 26 ウ・27 才

と言ふ。こゝに至つて小次郎は、妹あだしのが行方をはじめて知り、かつその最期の事をきゝて、涙を流し、「この上はすみやかに夜討し給へ」と勧め申せば、頼胤深く喜びて、主従すべて六十余人、密かに石浜の城へ押し寄せ給ふに、頃しも十月の事なれば、いとゞしく夜も長くて、その夜ははまだ明けやらず。「さていづくよりか入らん」とて、北の方へ回つて見給ふに、不思議なるかな、数万の鼠、芥をもつて堀を埋め堀を穿ちて、忍び入るに便りよくしたり。頼胤これを見給ひて、「これまつたく、あだしのが怨霊の鼠となりて我を導くにこそ」とて、しきりに感じ給ひしかば、小次郎も今さらには、いとゞ不憫に思ひけり。

へはや夜も明けなん。みな急げく。

へげにも怪しき鼠の振る舞ひ。忍び入るにはこれ究竟。志ある輩

は、小次郎に続き給へ。いでく案内つかまつらん。

「27ウ・28オ」

頼胤をはじめとして、原の小次郎・鳴子の庄司ら、たやすく城の内へ忍び入つて、喚き叫んで斬つて回るに、石浜の兵とも大きに驚き、「すは夜討こそ入にけれ。我討ち取らん」と起き出るに、あまたの鼠群がりて、間毎く行灯の油を舐め、あるひは弓の弦を食ひ切り、あるひは太刀・刀の柄を食ひ切りておきしかば、城の兵多勢なりといへども、忽ちに度を失いて、討たる、者数を知らず。たまぐ打物を引提げて、いで向かはんとする者あれば、あまたの鼠飛びかゝり、面へ食らひ付きなんどしたりければ、思ふまゝに働き得ず。みなこゝか

しこに追ひ詰められて、一人も残らず討たれけり。○治部之進は、夜毎ぐに瓜生野御前と酒盛りして、憚る気色もなく楽しむ。

へ目指す敵は治部之進。取りな逃がしそ。進めや人々。

へ逃ぐるるとて逃がそうか。返せく。

へまづ待てく。ちよつと手水に行つて出直してくるぞ。

へこれはけしからぬ鼠だ。俺は生まれついて猫舌だに、あれ又唇

へ食らひ付きおつた。あゝ痛へく。

へ寝ずの番の俺が食ひ付かれてはどうもすまぬ。

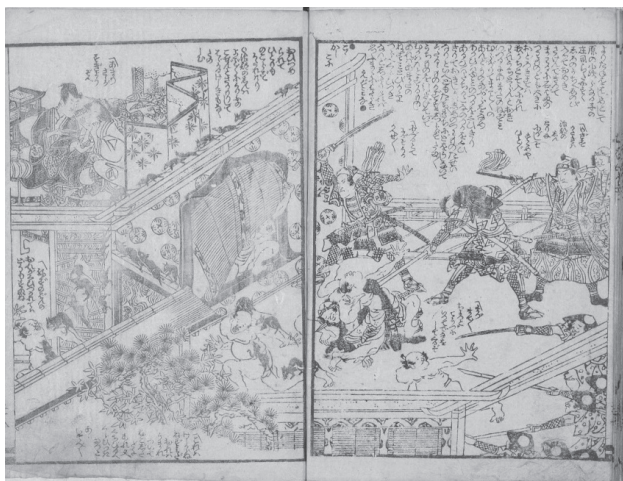


写真 15 27ウ・28オ

へあまり酒が過ぎようぞへ。

「28ウ・29オ」

この時、幕割治部之進は瓜生野御前もろともに闇に入り、宵の酒盛り  
に熟睡して、前後も知らず臥したりしが、一人の兵走り来て、慌た、  
しく呼び起こし、「いまだ知らずやおはすらん。実胤の舎弟頼胤は、  
原の小次郎らあまたの兵を従へて、忍び入つたる夜討の軍配。縦横無  
碍に斬つて回る、その矛先あたりがたく、味方の兵防ぎかね、はや  
過半討たれたり。ひとまづこ、をおん開きあつてしかるべし」と、言  
ひも果てぬに矢一つ来つて、かの兵は首の番をはたと射られ、あつと  
叫びて倒れたり。治部之進ちつとも騒かず、「頼胤が分際にて、我が  
手の者を討ち取るとも、何程の事かあらん。いでもの見せん」とつ、  
立ち上げれば、「逆賊幕割治部之進、そこ動かぬ」と呼ば、りて、頼  
胤は小次郎庄司を左右に従へ、三方よりおつ取り込め、弓に矢取つて  
うち番ふ。弓の弦はおのづから、ふつとちぎれて諸共に、矢は後ろへ  
ぞ飛び散つたる。「こは口惜し」と主従三人、刀を抜いて斬らんとす  
るに、五体竦みて身はかなはず、「無念く」と歯噛みをなし、又詮  
方もなかりけん。治部之進嘲笑ひ、「我実胤を恨むる事あるによつて、  
その心を惑はして家を乱し、藏人をはじめとして、邪魔になる奴ばら  
を皆殺しにし、あだしのを謀りて彼に子を産ませたりしが、五武六が  
告げ口して、我が子を失ひしこそ残り惜しけれ。されば、瓜生野御前  
の心を惑はせて、我がかたうど、し、片介に実胤を討たせしも、みな

これ我がなせし事なり。いでく汝らが首を刎ねて、千葉の血筋を絶  
やすべし」と、あくまでに広言し、刀を引提げ立ち出る。あはや頼胤  
主従は、只今討たるべう見えたる折しも、忽然として鼠四五匹現れ  
出たり。治部之進これを見て、忽ち狐の姿をなし、鼠を狙ふありさま  
は、又余念なき風情なり。その時、頼胤主従は萎へたる五体もとの  
ごとく、手足自在になりしかば、頼胤「さては」と心に悟り、主従  
刀を抜きつれて、斬らんとすれば治部之進は、雲を呼び風を起し、  
空中に昇らんとするところを、頼胤早く声をかけ、「己が名のつくり  
を捨つる狐かななぜ瓜生野を捨て、は行く」と呼ば、り給へば、治部  
之進は一句に恥ぢて怯むところを、主従「得たり」とおつ取り巻き、  
つひにづたくに斬り伏せて、小次郎その首を打ち落とせば、瓜生野  
御前この体にはじめて夢の醒めたる心地し、先非を悔ひ身を恥ぢて、  
自害してこそ失せにけれ。

つぎへつ、く

へ瓜生野御前、先非を悔ひ身を恥ぢて自害する。

へ治部之進、鼠を見て本体を現し、妖術を失ふ。

へ我が姉ながら謀叛の張本。はて是非もなき最期じゃなあ。

へ鼠と化して主兄に、力を添える妹あだしの。疑ひ晴れた成仏せよ。

へ心得がたき治部之進がありさま。さては、先年滅びたる与次郎

狐の怨霊なるか。ハテ怪しい。

己が名のつくりを捨つる狐かな

千葉自胤 原小次郎 なる子庄司

「29ウ・30オ」

まへのつゞき 狐は瓜を好むもの也。されば、狐といふ文字は、獸偏に瓜と書く。されば瓜生野御前、彼に誑かされ、謀叛の肩を持ちたるに、これを救はず、治部之進は忽ちに瓜生野を打すて、身を逃れんとし、たれるゆゑに、頼胤かくは詠じ給へり。この治部之進は先年、実胤に討たれたる与次郎狐の怨念が、かゝる曲者と化したるならん、と人みなはじめて悟りしゆゑに、かゝる名句も出来しなるべし。○しかるに、その次の日、百姓体と見へたる六十余りの男、年経る狐の鉄砲にて撃



写真16 28ウ・29オ



写真17 29ウ・30オ

たれたるを背負ひつゝ、石浜の城へ来て言ふやう、「それがしは下総の国千葉の百姓に、椎名の与次郎と申す者なり。倅与次郎、十三才の時、家出して行方知れず、諸所方々を尋ぬるところに、与次郎は帰らずして、この狐の死骸、彼が衣裳櫃のうちにあり。いと怪しく思ふゆゑに、この年頃、取りも捨てずそのまゝにさしおきて候に、狐の死骸は今に腐れず、すでに十年余りに及べり。しかるに、我が子与次郎は幕割治部之進と改名して、石浜の執権となり候よし、近頃伝へきて、懐かしく、彼に見せばやと思ひて、この狐の死骸を負ふて、遙々と来



て問へば、『治部之進は逆心を企て、昨日討たれたり』とき、て、悲しき事限りなし。まことかの治部之進は我が子与次郎に候やらん。せめて、その首に一目会はしてたび給へ」と、涙とともにかき口説けば、頼胤主従ますく奇異の思ひをなし、「これ全く、与次郎狐が怨霊、恨みを返さんために、己が名に等しき賤の子与次郎に乗り移り、かくまで崇りをなせし事、三国伝来の悪狐玉藻前に異ならず」とて、皆々舌を巻き、やがて治部之進が首与太平に見せ給へば、二目とも見ず悲しみ嘆き、謀叛の余類と身を恥ぢて、あたりの川へ身を投げけり。

へ与太平、我が子の首を見て驚き悲しむ。

へげに恐ろしき狐の怨念。殺生石も目のあたり。不思議といふもあり。

原小次郎

ちばよりのね

なる子庄司

口上

へ近頃の合巻は、大かた世話事が多いゆゑ、ちと気を変へた時代話。堅いやうでも実があると、御評判を頼み上げます。

〔30ウ〕

千葉の新介頼胤は、よどばし・鳴子が助けによつて、逆賊幕割治部之進を亡ぼして、石浜の城に移り、原小次郎をはじめとして、功ある輩にあまた所領を宛ておこなひ、すべて誠をもつて家を治め給ひしかば、千葉の家再び栄へて、朝露が腹に子供あまた出来しかば、二男

に霞の郡司が家を継がせ給へば、原小次郎が妻夕露も、男子三人まで産みけり。これによりて、鳴子の庄司は小次郎が二男を養ひて家を継がせ、折々石浜へ出仕して、いづれもめでたく栄えけり。そもく実胤武勇に誇り、ゆゑなく千年の狐を殺し給ひしゆゑ、その崇りにて、一旦千葉の家乱れたれども、妖は徳に勝たず、頼胤再び家を興しぬ。

へめでたし〜。

へおめでたう存じます。

馬琴作 春亭画

筆耕

二四 武笛 其外 知道



写真 18 30ウ

## 三、解題

『千葉館世継雑談』（以下『世継雑談』）は、文化九年に刊行された馬琴の短編合巻で、千葉家の御家騒動を軸に、狐の怪異や鼠の活躍などをからめた作品である。一丁表に「辛未春如月稿成」とあるので、前年二月には成稿していたと思われる。前稿の書誌事項に記した通り、画工は歌川国貞（前編）と勝川春亭（後編）が担当している。本作のように前編と後編で画工が異なるのは、文政九年刊の『姫万両長者鉢木』（前編・歌川国貞、後編・歌川美丸）のみで、異例の事態であったことは想像に難くない。ここで注目すべきは、いずれも前編を担当しているのが国貞だということである。

国貞といえ、馬琴の著作に最も多く挿絵を提供した画工であり、天保十一年八月二十一日付殿村篠斎宛書簡（代筆）<sup>(1)</sup>に「小生稿本之通り二少しも違はず画がき候者ハ、古人北尾并二豊国、今之国貞のミに御ざ候」とあるように、馬琴の評価も高かった。ただ、国貞は役者似顔絵や美人画の製作で多忙を極めており、読本や合巻の挿絵に遅れが生じることも多かった。例えば、天保四年四月九日付河内屋茂兵衛宛書簡<sup>(2)</sup>からは、読本『開巻驚奇侠客伝』第三集（天保五年刊）の挿絵が遅れていることに困惑している様子が窺える。

画工国貞、二月下旬より団扇の画、并二役者にしき画、こみ合居候よしにて、今以さし画ハ一枚も出来不申候。さてくはり合な、こまり申候。

また、同年五月十六日付小津桂窓宛書簡および七月十三日付殿村篠斎宛書簡<sup>(3)</sup>では、「此画工、甚流行故、勢ひ甚しく、少しも気に入らぬ事あれば、一年も二年も引ずり候。先年、『白女辻占』の画杯も、三年めにてやうく出来候事有之」「よみ本のさし画ハほねをれ候故、骨の折れぬにづらのにしき画の方、便利と見え、手古でも動き不申候間」と述べ、国貞への批判を強めている。とりわけ、傍線部で示したように、文政十三年刊の合巻『代夜待白女辻占』は、文政十年の段階で成稿していたものの、国貞の挿絵が遅れたために、刊行までに三年を要した<sup>(4)</sup>。さらに、文政十一年十月四日付馬琴日記<sup>(5)</sup>に

美少年録（近世説美少年録―筆者注）二の巻板下筆工丸九丁、今日大半（大坂屋半蔵―筆者注）江わたし候節、画工国貞、無程かほ見せ、にづら画にて弥出来かね可申候へバ、正月うり出しの間二合かね候二付、ふりかへ三ノ巻方末、国安二画せ可然旨、内談いたしおく。

とあるように、間に合わない場合は、続きを他の画工に担当させることもあった。ただ、翌五日の日記<sup>(6)</sup>に「昨ばん、半蔵参りかけ合候処、ぜびく画き度候間、出精いたし、間二合せ可申旨、国貞申二付、任其意候よし、告之」とあることから、実際には国貞が描くことで落着いたようである。つまり、あくまで推測ではあるが、『世継雑談』は本来、国貞一人が担当する予定であったが、正月の出版に間に合わせるために、急遽、後編の画工を変更した可能性が考えられる。

さて、二十九丁裏三十丁表に「近頃の合巻は、大かた世話事が多い

ゆゑ、ちと気を変へた時代話。堅いやうでも実があると、御評判を頼み上げます」とあるように、本作は演劇種の脚色を採用せず、御家騒動を軸とする時代物として描いている。文化六年以降、馬琴は京伝と歩調を合わせるように、歌舞伎・浄瑠璃の脚色や趣向を駆使した作品を数多く著している。『世継雑談』が刊行された文化九年に限っても、全六作のうち、『浪葩桂夕潮』『傾城道中双陸』『行平鍋須磨酒宴』『鳥籠山鸚鵡助剣』の四作が、演劇作品を基盤としている。このような状況下にあつて「気を変へた時代話」を著したのは、合巻とはいえ、読本的内容を有する作品を志向していたからであろう（水野稔「馬琴の短篇合巻」『江戸小説論叢』中央公論社、一九七四年）。

内田保廣「解題」（同校訂『叢書江戸文庫』② 近世説美少年録「下」国書刊行会、一九九三年）が指摘するように、陶晴賢の謀反を描いた馬琴合巻『月都大内鏡』（文化十三年刊）は、読本『近世説美少年録』（文政十二年〜嘉永元年刊）の前駆的作品として知られており、その初期構想を窺う上でも重要な作品と言える。この点から『世継雑談』を俯瞰したとき、「千葉」「幕割」というキーワードから直ちに思い出されるのが、読本『南総里見八犬伝』（文化十一年〜天保十三年刊、以下『八犬伝』）である。『八犬伝』第六輯には、千葉自胤の重臣馬加大記常武による陰謀と、父を殺された犬坂毛野による仇討（対牛楼の仇討）が描かれており、『世継雑談』との関係が窺える。以下、幕割治部之進と馬加大記の類似点を中心に比較してみたい。

一つ目は『世継雑談』七丁裏八丁表から八丁裏九丁表にかけてで、

治部之介が実胤の飯椀に毒を盛る場面である。これは『八犬伝』第五十六回<sup>⑦</sup>で、大記が監禁中の犬田小文吾に毒を盛る場面と類似している。

椀中に毒をまじへて小文吾に差めさせしに、させる験もなかりしかば、「こはいかに」と訝りて、なほ又烈しき毒を飼ふこと、六七遍に及びしかども…（傍線筆者）

なお、藤沢毅『月都大内鏡』と御家騒動（『文教国文学』35・36、一九九七年）によれば、治部之介が毒殺未遂事件を見出したかのようにして実胤の信用を得るといふ趣向は、加賀騒動物の実録乃至はそれをもとにした読本『絵本雪鏡談』に取材することである。二つ目は『世継雑談』九丁裏十丁表で、治部之介が父の家督を継いだときに治部之進と改名するが、『八犬伝』第五十四回で、大記も千葉実胤に仕え始めたときに、記内から大記に改めている。ちなみに、大記の旧主孝胤の父は馬加陸奥入道光輝といい、治部之進の実名「みつてる」と一致している。三つ目は『世継雑談』十丁裏から十二丁裏十三丁表にかけてで、治部之進が両執権を謀殺し、その一族を滅ぼす場面である。これは『八犬伝』第五十四・五十五回で、大記が栗飯原胤度とそその一族を皆殺しにする場面と類似している。とくに第五十五回で、家老栗飯原胤度が足利成氏に内通して陰謀を企てていることを、大記が自胤に密告する部分に、『世継雑談』との近しい関係が見て取れる。

・さても原藏人・木の内東一郎ら、すべて君を疎み奉るともがら、内談を相極め、明日彼ら推参して、君を押し籠め奉り、御舎弟頼

胤殿を家督となし奉らんと目論むよし、只今伝へ受け給はり候ひぬ。(『世継雑談』十一丁表)

・近ころ世の風聞に、栗飯原首胤度は、千葉一族の家系に誇りて、主君御兄弟を推倒し、武蔵七郷、葛西三十ヶ荘の采邑を、横領せん、と窃に計較み、成氏朝臣に内応して、逆心既にその間なし、と仄に聞え候ひしが：(『八犬伝』第五十五回)

なお、もう一人の家老籠山逸東太は、大記の計略に乗せられて胤度を討つものの、畏にはめられて千葉家を逐電することとなる。

このように、類似点が認められるなか、実胤・頼胤(自胤)の描かれ方には違いが見られる。『世継雑談』の場合、実胤が治部之進に操られる暗愚な主君であるのに対し、頼胤は悪臣を討ち千葉家を治める善良な主君となっている。一方『八犬伝』では、大記が「自胤は暗愚の弱将」(第五十六回)と評するように、実胤の暗愚な性質を自胤に賦与している。こういった歴史上の人物に対する善悪評の変化は、勳善懲悪を標榜する馬琴の小説作法を考えるうえで、大いに注目すべき点であると言えよう。

最後に、個別の趣向について見ていきたい。まず三丁裏四丁表には、実胤が陰陽師の占いを無視して、鎮守である狐の社を破却する場面が描かれる。これは、馬琴読本『敵討裏見葛葉』(文化四年刊)冒頭、和泉国和泉郡信太の領主となった清原定邦が、信太の森の楠本稲荷を、村人の反対を無視して焼き払ったことと類似している。続く四丁裏五丁表から六丁表にかけて、治部之介が与次郎と道を争って斬り合いの

末、相手に突き殺されてしまいが、父の治部右衛門は与次郎が我が子にまさる美少年であったので、彼を治部之介とする場面がある。これは、井原西鶴『武家義理物語』巻二の四「我子をうち替手」(貞享五年刊)や南柚笑楚満人『敵討義女英』(寛政七年刊)とよく似ている。とくに、同年代の少年が道を争って喧嘩した末に斬り合いに発展し、我が子を殺された父親が、加害者である少年を養子として迎えるという点が共通している。ただ、馬琴流の勳善懲悪理念に基づき、「りよく」に目が眩んだ治部右衛門は、不慮の死を迎えることになる。

後編に入り、二十二丁裏二十三丁表には、瓜生野が水門から姿をあらわす場面がある。これは、馬琴読本『椿説弓張月』拾遺・第五十四回(文化七年刊)で、阿公が王子を連れて水門から逃げ出す場面と類似しており、挿絵の構図もよく似ている。続く二十三丁裏二十四丁表で、片介が治部之進と思いきや誤って実胤を鉄砲で撃つ場面は、「仮名手本忠臣蔵」五段目(二つ玉の段)で早野勘平が誤って定九郎を撃つ場面と類似している。ただ、後に勘平は舅与市兵衛を撃つたと誤解して自害するが、片介は実胤を撃ってしまったことを悔いて自害する。二十六丁裏二十七丁表から二十七丁裏二十八丁表にかけて、鼠の大群が、芥で堀を埋めたり堀を食い破ったりして、石浜の城へ押し寄せる場面がある。これは、三井寺の頼豪阿闍梨が死後、鉄鼠となって比叡山の經典を食い破ったという伝説とよく似ている。馬琴はすでに、読本『頼豪阿闍梨怪鼠伝』(同五年刊)で妖鼠の術を用いて頼朝の命を狙う美妙水冠者義高を描いているが、作中、彼が山城の行者と猫鼠論

を戦わせる際、「世俗、鼠をもて、大黒天の使者と称す。故あるかな大黒は、水徳の神にして、北は子の方、その色黒く、すなはち水を主る」<sup>(8)</sup>と主張している。「北は子の方」とあるように、陰陽五行思想において子は北を指す。千葉氏は代々、妙見菩薩（北極星を神格化した菩薩）を信仰していた<sup>(9)</sup>ため、所縁の鼠を趣向として用いたのではないだろうか。

## 注

- (1) 柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成 第五卷』（八木書店、二〇〇三年）。
- (2) 同編『馬琴書翰集成 第三卷』（八木書店、二〇〇三年）。
- (3) 注(2) 前掲書。
- (4) 文政十年閏六月十一日付馬琴日記に、「西村や合巻白女辻六の巻、今朝四時過、稿之。満尾也」とある。引用は、柴田光彦編『曲亭馬琴日記 第一巻』（中央公論新社、二〇〇九年）に拠る。
- (5) 注(4) 前掲書。
- (6) 注(4) 前掲書。
- (7) 『八犬伝』の引用は、すべて濱田啓介校訂『新潮日本古典集成別巻 南総里見八犬伝 三二』（新潮社、二〇〇三年）に拠る。
- (8) 鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成 第九巻』（汲古書院、一九九九年）。

(9) 丸井敬司『千葉氏と妙見信仰』（岩田書院、二〇一三年）。

## 〔付記〕

資料の掲載を許可していただいた、立命館大学アート・リサーチセンターに深謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費（若手研究課題番号：18K12301）における成果の一部である。

---

## Summary

### *Chibayakata-Yotsugi-Zodan:* A Review of the Subject and Transliteration (Part II)

Kazunori NAKAO

A continuation of my previous study in *Memoirs of Nara University No.47*, this paper is a transliteration of *Chibayakata-Yotsugi-Zodan*, first published in 1812, with brief commentary added.

Since 1809, Bakin has written many works using the dramatic scripts and devices in *Kabuki* and *Joruri* to keep pace with *Santo Kyoden*. However, in this work that method has not been adopted. Rather, it is depicted as a historical drama centering on domestic squabble.

In addition, this work confirms the relationship with *Nanso-Satomi-Hakkenden*, first published in 1814-1842. For example, *Makuwari Jibunoshin*, the regent of the Chiba family, has been recast as *Makuwari Daiki*. Likewise, in this work *Yoritane*, the head of the family, is depicted as a good monarch who revives the Chiba family by defeating the bad retainers. On the other hand, *Yoritane* is depicted as an “unenlightened warlord” manipulated by bad retainers in *Hakkenden*. Such shifts in the negative and positive representations of historical figures are noteworthy points of consideration in Bakin’s novel, which advocates moral purpose.

**Keywords:** Kyokutei Bakin (1767-1848), *Gokan* (one type of illustrated novel), Chiba Family, Fox